

乳幼児期における異質なものへの理解と寛容

— アンチバイアス教育を手がかりとして —

山田 千明¹

要 旨

人間形成の基礎を培う乳幼児期を中心に、アメリカのアンチバイアス教育を手がかりに異質なものへの理解と寛容について検討するため、『幼稚園教育要領解説（2008年）』及び『保育所保育指針解説書（2008年）』から、国際化対応、異質なものへの理解と寛容に深い関わりがある箇所を整理した上で、日本でどのような固定観念や偏見、不正確な情報があるか質問紙調査を実施した。調査協力者はアンチバイアス教育についての概説を聴いた後、質問紙に回答した。

一番多かった回答は洋服や紙おむつの色等、ジェンダーに関するものであったが、物事をクリティカルに見る「気付き」の感性が敏感でないと、知らず知らずのうちに差別や偏見のある行為をとってしまう危険があることが見出された。

ヘイトスピーチ（憎悪表現）と呼ばれる動きが増えている状況の中、家庭の教育力が低下している現代において、幼稚園や保育所等で異質なものへの理解と寛容の心を育む教育が重要であると結論づけた。

キーワード：偏見 寛容 アンチバイアス教育 乳幼児期 共生

はじめに

1960年代以降、海外生活を体験して帰国した子どもの日本の学校での不適応が問題になったのは、日本社会自体が異なるものを受け入れることに不慣れで、「単一民族国家」という誤った認識の中、日本での教育対象はすべて「日本国内で日本人の両親から生まれ、日本で学び、働き、一生を終える子ども」だという思い込みがあったからだと考えられる。

一方、現代の学校教育において解決が図られるべき喫緊の課題としていじめ問題がある。文部科学省の調査によれば、学校におけるいじめの認知件数は2012年4月～9月の約半年で144,054件（2011年度は70,231件）、法務省の調査によれば、いじめ^{注1}に関する人権侵犯事件数は、2012年には3,988件で、前年に比へ20.6%増加し、昨年引き続き過去最高となった。2013年6月にはいじめ防止対策推進法が成立する等、国、地方公共団体、学校をあげてその取り組みが強く求められ

ている。

いじめの要因について整理した中林・廣岡¹は、その原因のひとつに「同質思考にとらわれ、異質なものを排除しようとする傾向が強いこと。」を挙げている。学校での差別やいじめの経験について外国籍住民に尋ねた大阪市の調査²においても、「中国籍、その他については、『日本語をうまく話せない』が、差別やいじめの理由の20.2%」を占め、また、「『親が日本語を話せない』も多くあがっている」、「理由の『その他』については自由回答となっているが、『韓国人ということ』『国が違うということ』」という回答があったという。

ところで、乳幼児期は人生の出発点として重要な時期で、公共の福利^{注2}（public good）として幼児教育・保育政策が重要であると主張する"Starting Strong II : Early Childhood Education and Care (2006)"（日本語訳『OECD保育白書 人生の始まりこそ力強く：乳幼児の教育とケア（ECEC）の国際比較』）³では、多様化、知識の

（所 属）

1 山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

増大、機会が拡大する世界に向けて、乳幼児期こそ創造性や異質の他者を受け容れる態度を育てることを支援すべきであると主張している。これは、21世紀を迎えるにあたり、来るべき世紀の教育の四本柱（知ること、為すこと、共に生きること、人として生きること）として、“Learning: The Treasure Within (1996)”（日本語訳『学習：秘められた宝－ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』）⁴⁾で提示された中の「(他者と)共に生きることを学ぶ」に通ずるものである。ところで、「(他者と)共に生きることを学ぶ」ためには、すべての発達ステージにおいて適切な配慮が必要であるが、可塑性を考えると、人間形成の土台となる乳幼児期から学童期が重要な意味をもっている。2歳から9歳までの時期は、健全な自己概念や偏見のない態度を作っていくうえで十分に注意を払うべき時期で、そうしないと後になって多様な人々を認め、尊重し、気持ちよく付き合うことを教えるのは難しくなる⁵⁾と、特に2歳から9歳頃までを重視し偏見から自由な子どもを育てようとする教育に、アメリカのアンチバイアス・アプローチがある。

本稿では、そのアンチバイアス教育を手がかりとして、人間形成の基礎を培う乳幼児期を中心に、多文化社会における共生にとって基礎となる異質なものの理解と寛容について検討したい。

1. 保育の場における異質なものの理解と寛容

「国際化の時代」「グローバル時代」と称される現代、ヒト、モノ、カネ、情報が地球規模で移動するのは、大人の世界に限らない。日本の保育現場にも1990年代から「見える形」^{注3)}での「多様化」が急速に進展し、「みんな同じ」から「それぞれが個性をもった存在」として子どもを捉えようとの動きがある。

日本保育協会『保育の国際化に関する調査研究報告書—平成20年度』（2009）によれば、外国人児童の保育所入所数は67カ国—11,551人である（図参照）。

『保育所保育指針』に「外国人」という文言が初めて登場するのは1990年改定版で、「外国人の人

など、自分とは異なる文化を持った人の存在に気づく」（4歳児）、「外国の人など自分とは異なる文化を持った様々な人に関心を持つようになる」（5歳児）、「外国の人など自分とは異なる文化をもった様々な人に関心を持ち、知ろうとするようになる」（6歳児）という記載が見られる。

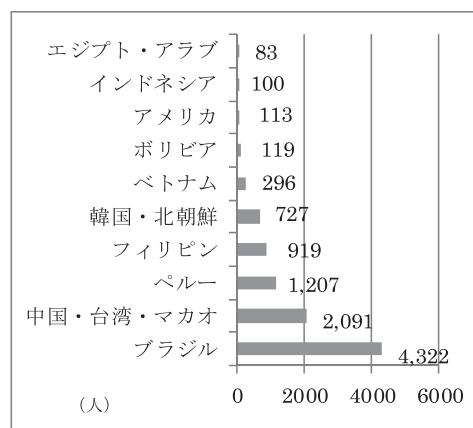


図 国籍別保育所入所児童数（上位10か国）

日本保育協会『保育の国際化に関する調査研究報告書—平成20年度』（2009）の数値を基に筆者作成

幼稚園については、2008年改訂『幼稚園教育要領解説』まで待たなければ国際化対応についての言及はないが、現行の『幼稚園教育要領解説（2008年）』と『保育所保育指針解説書（2008年）』には、次のように記述されている（下線は引用者による）。なお、幼稚園については「自分と異なる様々な個性をもった友達と接する」、「他者の気持ち」への気付きについての言及が、異質なものの理解と寛容に深い関わりがあると考えられるのでその箇所も摘出した。

[幼稚園教育要領解説書]

国際化の進展に伴い、幼稚園では外国人や海外から帰国した幼児の受け入れが多くなっている。これらの幼児の多くは、日本以外の国での生活経験などを通して、我が国の社会とは異なる言語や生活習慣などを身に付けているが、その実情は幼児によって異なっている。このため、これらの幼児の受け入れに当たっては、教師自身が、当該幼児が暮らしていた国の生活などに関心を持ち、理解しようとする姿勢を保ち、一人一人の幼児の実情を把握し、その幼児が安心して自己を十分に発

揮することができるよう配慮することが大切である。また、教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で、自然に日本語に触れたり、日本の生活習慣に触れることができるように配慮することも大切である。さらに、幼児が、日本の生活や幼稚園生活に慣れていくよう、家庭との連携を図ることも大切である。〈第3章 第1 第2節 2〉

幼稚園は集団での生活の場であり、様々な人々と出会う場である。そこで、幼児は自分と異なる様々な個性をもった友達と接することになる。

教師や友達と共に生活する中で、初めは「○○ちゃんは鉄棒が上手」、「○○ちゃんは歌が好き」といった表面的な特性に気付くことから、次第に、「○○ちゃんならいい考えをもっていると思う」、「気持ちのやさしい○○ちゃんならこうするだろう」など、次第に互いの心情や考え方などの特性にも気付くようになり、その特性に応じてかわるようになっていく。そして、遊びの中で互いのよさなどが生かされ、一緒に活動する楽しさが増してくる。

そのためには、友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通して、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を重ねることも必要である。

さらに、幼児は周囲の人々に自分がどう見られているかを敏感に感じ取っており、よき理解者としての教師の存在は大きい。自分に愛情をもって温かい目で見守ってくれる教師との生活では、安心して自分らしい動きができ、様々な物事への興味や関心が広がり、自分から何かをやるようとする意欲や活力も高まる。そして、一人一人のよさや可能性を見だし、その幼児らしさを損なわず、ありのままを受け入れる教師の姿勢により、幼児自身も友達のよさに気付いていくようになるのである。〈第2章 第2節 2〉

幼児は他者と様々なやり取りをする中で、自分

や他者の気持ち、自他の行動の結果などに徐々に気付くようになり、道徳性の芽生えをより確かなものにしていく。特に、仲間と楽しく過ごす一方で、いざこざや葛藤の体験を重ね、それについて考えたり、教師や仲間と話し合ったりすることは、自他の気持ちや欲求は異なることに気付かせ、自分の視点からだけでなく相手の視点からも考えることを促して、他者への思いやりや善悪のとらえ方を発達させる。〈第2章 第2節 2〉

[保育所保育指針解説書]

保育士等は、保育という営みが、子どもの人権を守るために、法的・制度的に裏付けられていることを認識し、「憲法」、「児童福祉法」、「児童憲章」、「児童の権利に関する条約」などにおける子どもの人権等について理解することが必要です。

また、子どもの発達や経験の個人差等にも留意し、国籍や文化の違いを認め合い、互いに尊重する心を育て、子どもの人権に配慮した保育となっているか、常に職員全体で確認することが必要です。体罰や言葉の暴力はもちろん、日常の保育の中で、子どもに身体的、精神的苦痛を与え、その人格を辱めることが決してないよう、子どもの人格を尊重して保育に当たらなければなりません。保育士等の言動は子どもに大きな影響を与えます。〈第1章 4 (1)〉

異なる文化を持つ人々の存在は、近年、ますます身近になってきています。保育所においても、多くの外国籍の子どもや様々な文化を持つ子どもたちが、一緒に生活しています。保育士等は、一人一人の子どもの状態や家庭の状況などに十分配慮するとともに、それぞれの文化を尊重しながら適切に援助することが求められます。また、子どもが一人一人の違いを認めながら、共に過ごすことを楽しめるようにしていきます。

保育所の生活の中で、様々な国の遊びや歌などを取り入れたり、地球儀や世界地図を置いたり、簡単な外国語の言葉を紹介していくことも、子どもが様々な文化に親しむ上で大切なことです。

異なる文化を持つ人との関わりを深めていくこ

とは子どもだけでなく保育士等にとっても重要であり、多文化共生の保育を子どもや保護者と共に実践していきたいものです。 <第3章 1 (2) イ (イ) ⑭>

保育所では外国籍の子どもや様々な文化を持った子どもが共に生活しています。保育士等はそれぞれの持つ文化の多様性を尊重し、多文化共生の保育を進めていくことが求められます。

例えば外国籍の保護者に自国の文化に関する話をしてもらったり、遊びや料理を紹介してもらったりするなど、子どもが異なる文化に触れる機会を通して文化の多様性に気付き、興味や関心を高めていくことができるよう、子ども同士の関わりを見守りながら、適切に援助していきます。

外国籍の子どもの文化を尊重することだけでなく、宗教や生活習慣など、どの家庭にもあるそれぞれの文化を尊重し、十分に認識することが必要です。保育士等は、自らの感性や価値観を振り返りながら、子どもや家庭の多様性を積極的に認め、互いに尊重しあえる雰囲気をつくり出すことに努めましょう。 <第3章 2 (1) オ >

保育所において、固定的なイメージに基づいて子どもの性別などにより対応を変えたり、固定的な意識を植え付けたりすることがないようにしなければなりません。子どもの性差や個人差を踏まえて環境を整えるときにも、一人一人の子どもの行動を狭めたり、子どもが差別感を味わったりすることがないように十分に配慮します。子どもが将来、性差や個人差などにより人を差別したり、偏見を持つことがないように、人権に配慮した保育を心がけ、保育士等自らが自己の価値観や言動を省察していくことが必要です。

男女共同参画社会の推進とともに、子どもも、職員も、保護者も、一人一人の可能性を伸ばし、自己実現を図っていくことが求められます。 <第3章 2 (1) カ >

以上みてみると、幼稚園においては、外国人幼児や帰国幼児について、適応にウエイトが置かれ

ている。他の箇所にも異質なものの理解と寛容についての言及はあるものの、それが外国とつながりのある幼児に関連づけて意識されているわけではない。

一方、保育所は、外国籍の子どもを窓口に、一人一人の特性に着目し、多様性を尊重しようという姿勢が示されている。マイノリティ対マジョリティという二項対立の図式ではなく、「それぞれが個性をもった存在」と捉えていることが重要で、「多様性」は国籍に限らず、文化、民族、使用言語、ジェンダー、障害、家族構成、家庭の経済状態、健康状態、食べ物の嗜好等、さまざまな要素について考えられる。

保育所において、多様性尊重の姿勢がみられるのは、保育所が児童福祉施設であるというその性質によるところもあろう。それに加え、1989年12月の「出入国管理及び難民認定法」の改正(1990年10月施行)により、日系移民の子孫に定住者としての在留資格が与えられ、就労目的で渡日する南米出身の日系人が増加し、その保育ニーズもあり、保育所に在籍する外国人乳幼児が量的に拡大したことが大きく影響していると考えられる。

異質なものの理解と寛容の教育は、他者との違いを認識し始める乳幼児期から実践することが重要であるが、実際は、「乳幼児は新しい状況にすぐに慣れるから」と、多文化体験をもつ子どもの教育への関心は主に小学校高学年以降であった。

その後、実際に外国につながりのある乳幼児を受け入れた保育所による外国人保育所紹介ビデオ(仙台市/1996~97年)の作成、『外国人のためのお弁当』(1996年)という本の出版、各国語による保育の手引き(名古屋市/1993年、日本保育協会/1997年、大阪府八尾市/2001年、広島大学留学生センター/2001年)の作成等があり、異なる文化からやって来た子どもやその保護者が日本の保育所にスムーズに適応できるような試みが模索されることとなった。

1990年版『保育所保育指針』に「外国人」という文言が登場し、保育現場の急速な多様化の現状を踏まえながら、1999年版には子どもの権利

条約の重要概念である「乳幼児の最善の利益」の考慮が取り入れられ、一人一人の特性に着目し、多様性を尊重しようという姿勢が示されてきたのではないかと考えられる。

2. アンチバイアス・アプローチ

アンチバイアス教育は、多民族国家アメリカで誕生し、その内容は、1989年に発行された *Anti-Bias Curriculum: Tools for Empowering Young Children* に示されている。1994年には玉置哲淳らによって翻訳され、『ななめから見ない保育—アメリカの人権カリキュラム—』として日本にも紹介されて、日本の幼児教育者関係者に関心をもたれた。日本、韓国、オーストラリアをはじめ、アメリカ以外でもアンチバイアス教育の実践がみられる。

アンチバイアス教育の「偏見から自由な子どもを育てる」という基本は共通するが、外国人幼児に対する多文化保育には、肌、目、髪の毛の色等に代表される可視的相違点をもつ人々で構成されるアメリカでの実践と、不可視的相違をもつ人々への差別が存在するアジアとでは、その展開方法に違いがあるのではないかと考えられる。

ダーマン・スパークスは、幼児の態度と自己概念について、アメリカでの多くの調査結果から明らかになることの1つとして、「3～4歳までに子どもは、自分が何者であるかということについて、肯定的あるいは否定的な社会のメッセージを吸収している。自分より色の黒い人、異なった言語を話す人、障がいのある人に対して幼児は、不快や嫌悪や恐れを示し、皮膚の色や着ているもので他の子どもより自分は優れているというように考え始める。皮膚の色、着ている服、言語能力ゆえにからかったり、一緒に遊ぶことを拒否したりする」ということを挙げている^{注4)}。そこで、アンチバイアス教育では、身の回りにある固定観念、不正確なもの、偏見にとらわれているものを取り除き、公平なものに置き換えることが重要とされる。

3. 日本にある固定観念や偏見に関する質問紙調査

日本では、どのような固定観念や偏見、不正確な情報があるのだろうか。ここで、大学生の協力を得た質問紙調査によりみてみたい。

(1) 質問紙調査の目的

多文化に生きる子どもたちの保育の場が、さまざまな文化的背景をもつ人々と気持ちよく共に過ごす場であるためには、固定観念に囚われることなく、自由な発想で、ものごとをありのまま、まっすぐ見る目、従来実施してきたことを無批判に踏襲するのではなく、もう一度クリティカルに捉え直すことのできる柔軟な感性の涵養が求められる。

どのような固定観念や偏見、不正確な情報が日本にあると大学生が感じているか実態を捉え、「社会のメッセージ」を把握することにより、日本における異質なものへの理解と寛容のための教育を考察する基礎資料とする。

(2) 期間

200X年～201Y年（6年間）
年1回、協力者は毎年異なる

(3) 協力者

関東地方の大学生 計282名

(4) 方法

調査協力者は、アメリカで制作された約30分の長さのアンチバイアス教育の紹介ビデオ^{注5)}を視聴後、アンチバイアス教育についての概説を聴く（ビデオは英語で説明がなされているため、筆者が適宜日本語で解説し、ビデオ上映も含め90分程度）。ビデオには、学校で用いられているテキスト等の登場人物が白人中心ではないか、アメリカ先住民についてステレオタイプされた画像が用いられていないか、車椅子利用者に対し「あの人、どうしたの？」と自分に尋ねる娘をたしなめる母親のシーン等が登場する。

上記の説明から問2日において、質問紙に回答する。

(5) 結果

一番多かった回答は洋服や紙おむつの色等、ジェンダーに関するものであった。それ以外の回答では次のような事例が出された。

[回答 1]

障がいのある人を示す時、車椅子利用をはじめ肢体不自由児・者等、外見から気づきやすい表現が多い。外見ではわかりにくい障がいに対する理解が必要。

[回答 2]

「体毛は汚い」「男性には体毛があり、女性には体毛がない」「女性は体毛を処理すべきだ」という固定観念。「毛抜き」という言葉は「毛」は抜くものだという誤解を与えてしまうので、「ピンセット」という言葉で置き換えるのがいい。

[回答 3]

勉強ができる子は人間としてできていて、いい子であり、勉強ができない子は人間としてもできていなくてダメな子という偏見がある。

[回答 4]

「家庭には父親と母親がいて、その上で子ども達が育つものである」という固定観念がある。様々な理由により、ひとり親家庭で育った子どもに対して、「かわいそう」「不幸」「ぐれてしまう」などといったひどい誤解や偏見を持っている人が多い。

[回答 5]

「子どもは元気なもの」という固定観念から「元気＝大きな声で歌う」ということに結びつけられてしまっている。

[回答 6]

障がいのある人はかわいそうだから助けなければならないという固定観念。障がいのある人はかわいそうなのではなく、周りの環境が彼らをかかわいそうにしている。例えば車椅子のためのスロー

プや、点字や、エレベータなどがあれば、彼らは普通に生活できる。大変そうなのは、環境が整っていないからである。

[回答 7]

動物の鳴き声。犬は日本ではワンワンだが、タイではホンホン、韓国ではモンモン、アメリカではバウワウ。それにも関わらず、子ども達に、犬はワンワンと鳴くんだと一概に教えていいのだろうか。

(6) 考察

アンチバイアス教育についての概説の中で、「ひたたくりに注意というポスターで、犯人像が明らかに東南アジア系、南米系の顔になっていないか」「障がいについて否定的なメッセージになっていないか」「太陽の色は赤か」「水の色は水色か」「性別などによる固定的な意識をもつメッセージになっていないか」等、筆者が例示してしまったこともあり、新たな発想は少なかった。「ステレオタイプ的なものを4日間考えて探してみたが、概説でたくさんの例示があったため、新たに見つけるのは困難だった。おそらく(ある場面に遭遇して)自分で『これはおかしいのではないか』と気がつくか、誰かに教えてもらわない限り、ステレオタイプ的なものはわからないだろうと思った。」という回答があった。

このことから、物事をクリティカルに見る「気付き」の感性が敏感でないと、知らず知らずのうちに差別や偏見のある行為をとってしまう危険があるということがわかる。

おわりに

21世紀の社会は、国同士が競争するのではなく、例えば、「環境」という面を捉えても、地球規模で物事を考え、それぞれの国の人が助け合って生きていかなければならないことは自明である。しかし、「東京や大阪の在日コリアンの多い街で『朝鮮人は出て行け』『殺せ』などと連呼して歩く、ヘイトスピーチ(憎悪表現)と呼ばれる動きが増えている。」と朝日新聞社説でも取り上

げている^{注6)}ように近年異質排除の動きが顕在化する事象が現れている。

「共に生きること」が重要であるにもかかわらず、現状では、家庭の教育力が低下し、「共に生きる」ために不可欠なコミュニケーション力を十分に育むことができなくなっている現代において、社会全体で子どもを育てる、地域で育てる、すなわち、幼稚園や保育所などへの期待がますます増している。

誤った情報や固定観念、差別に「気付き」(awareness)、それらを公平なものに置き換えることにより、異質なものへの理解と寛容の心を育むことが重要である。異なる子どもの存在はホスト文化の豊饒化をもたらす。そして何よりも、多様な子どもがそれぞれ自分らしさを発揮できる居心地のよい保育の場は、どの子にとっても居心地のよい場なのである。

注

(注1) 学校におけるいじめに関する人権侵犯事件とは、いじめに対する学校側の不適切な対応等の事案で、学校長等を相手方とし、いじめを行った加害児童・生徒を相手方とするものではない。

(注2) 引用文献(3)の日本語訳『OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く：乳幼児の教育とケア (ECEC) の国際比較. 明石書店』等では、「public good」について「公共財」という訳語が用いられているが、原著には good と単数形で書かれているので、筆者は「公共の福利」という訳語を用いる。

(注3) 1980年代までも、第二次世界大戦前あるいは戦中に渡日し世代を重ねた「オールドカマー」と呼ばれる外国籍住民の存在はあったが、同化教育の影響もあり、多様性が「見えない」状況だったと言われている。

(注4) 引用文献(5)の日本語訳、玉置哲淳・大倉三代子編訳『ななめから見ない保育—アメリカの人権カリキュラム』解放出版社、1994年、6-7頁(日本語版への序)より。

(注5) Derman-Sparks, L. & Atkinson, B.(Producers) “Anti-Bias Curriculum [video]”, Pasadena, CA: Pacific Oaks College, 1988

(注6) 2013年5月23日付朝日新聞 DEJITAL 版社説欄より

引用文献

- (1) 中林あゆみ・廣岡秀一(2004) いじめの対処と豊かな人間関係を育む教育支援の在り方について～中学校教師を対象とした質問紙調査から～. 三重大学教育実践総合センター紀要. 24. 176
- (2) 大阪市(2011) 外国籍住民施策検討に係る生活意識等調査報告書 概要版. <http://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000004339.html> (情報取得 2013/9/19)
- (3) OECD (2006). Starting Strong II : Early Childhood Education and Care (222). OECD Publishing (日本語訳 OECD 編著 星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子訳 (2011) OECD 保育白書 人生の始まりこそ力強く：乳幼児の教育とケア (ECEC) の国際比較. 明石書店)
- (4) Delors, J. (1996). Learning: The Treasure Within ; Report to UNESCO of the International Commission on Education for the Twenty-first Century (85-97). UNESCO Publishing (日本語訳 天城勲監訳 (1997) 学習：秘められた宝 ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書. ぎょうせい)
- (5) Derman-Sparks, L. and the A. B. C. Task Force (1989). Anti-Bias Curriculum: Tools for Empowering Young Children. National Association for the Education of Young Children. の翻訳である玉置哲淳・大倉三代子編訳(1994) ななめから見ない保育—アメリカの人権カリキュラム. 解放出版社. 6-7(日本語版への序)より。

Understanding Different People and Tolerance in Early Childhood: Based on Anti-Bias Educational Considerations

YAMADA Chiaki

Abstract

This paper is intended as an investigation of understanding different people and tolerance in early childhood. It is based on anti-bias educational considerations.

First, passages about internationalization, the understanding different people, or tolerance are extracted from two Japanese governmental missives such as “The Commentary on Course of Study for Kindergarten” and “The Commentary on Guidelines for Nursery Care at Day Nursery.” Second, after a lecture on anti-bias education in USA, university students are given a questionnaire about stereotypes, bias, and incorrect messages in Japanese society.

The most answers of students are concerned with gender issues related to the color of clothes or paper diapers. And it is also demonstrated that people are prone to unwittingly behave discriminately or with bias if they lack the critical or sensitive awareness.

Recently, hate speeches are increasingly being made in Japan. It is concluded that nowadays to teach understanding different people and tolerance at kindergarten or day nursery in early childhood is becoming more important because of less educational function at home in Japan.

Keywords: Bias, Tolerance, Anti-Bias Education, Early Childhood, Living Together-Living with Others